

「あれで濛白さんのは、なかく禪のことなぞに觸れて、書かれて在るといふ話だが、その外の日本の小説は、やつぱり自然主義なぞといふ戀愛物なぞが多いのでせうな。」

「一概にさうとも云へませんが、さういふものも、なかく多いやうです。」

小野は再び心の中で微笑して、抗辯する迄もないと考へて、そんなことを答へる外なかつた。

「この頃は、どうも大變な世の中になりましたな。この間も新聞で見ると、何だといふぢやありませんか。どこか浅草あたりの藝術家といふのが、二人で一人の女を、共同に所有するといふ宣言を出したといふぢやありませんか。この頃流行の共同生活とかいふのを、更に三人で實行する譯ですな。」

「へい、さうですか。」

小野もその話は、鳥渡聞いてはゐたが、そんなデカダンな街ふ話を彼らは一笑に附してゐたために、さうよくは知らなかつた。そして老師が、そんなことを深く問題としてゐるのに、却つて驚いた位だつた。

「さうなつては、まるで禽獸ですな。さういふのを又、デカダンとか悪魔派とか言つて、讚美する藝術家もあるさうだけれと。……尤も、貴方がたとは違ひませうがな。」

「はあ。——」小野はそんなことを云はれると、併し何となく自分の心が樂つたいやうな、他人事ならず面伏せたい氣だつた。そしてそれを辯解するやうに、心持顔を伏せて云つた。「私どもも、さう道徳堅固といふ譯には參りませんが、まあ幾ら墮落致しましても、他人の女を深く思つて、馬鹿の限りを盡す位でございませうな。」

「それならまあよくあることだから、許せないと云つても仕方がないだらうが、共同は困るな。」

「でも、二人の男が同時に、一人に惚れてゐるとすれば、何方かに一方が奪はれて了ふより、悲劇で

ないかも知れません。或ひはそれが、最も幸福な解決だつたかも知れません。」

「では貴方も、なかく新しい方だな。が、そんなことは、到底貴方がたに出来る譯もなからう。精貴方がたは、一人で一人を思ひつめる位に、して置いて貰はなかつて困る。」

老師はかう云つて、笑ふのでも嘲るのでも、憤るのでも諷すのでもない、何にもない獪然たる顔付で、書院の窓から見えてゐる、斜に夕日の煙つた裏山の竹林を、眼を上げて見やつてゐた。

「私もさうありたいと思つて居ります。」

小野はその一語で何だか老師に、かすけく自分の心の戀を、是認して貰つたやうに感じて、心からさう應じたのだつた。……

やがて彼は、老師の許を辭して、裏山の日影を仰ぎながら、少し俣を待たせ過ぎたと思ひながら、門を出ようとした。と、その時、案内してくれた先刻の若僧が、下駄を鳴らして追ひかけてきて、途中の郵便函へ入れてくれと、一通の手紙を頼まれた。彼はそれを微笑と共に承知して、その太い威つ文字をちらと見ながら、何気なく裏を返して見たら、「釋鐵枷」と署名してあつた。

待たせて置いた俣に乗つて、何となく、心持になり切りながら、彼は歸つて行つた。それは何だか彼の心も彼の戀も、すつかり淨化され、祝福されてゐるやうな感じだつた。

「……去年の秋のお彼岸にね。残り天気がいいのですから、子供たちを連れて上野へ遊びに行つたのですよ。するとね。あの池の端の辨天様の前を通つてゐる時、横合から急に若い洋服の男が飛び出せう。そして私たちが歩いて行くところを、手に持つてゐた黒い寫眞器を、いきなり此方へ向けるんで禮の積りなんせう、鳥渡お辭儀をしたつきり、さつさと行つて了つたんですよ。何處の人が、何のために撮つて行つたんだらうと、何んだか氣味が悪いとは思ひましたがね、問ひ訊す譯にも行きませ上る處へ、それが大きく出てゐるぢやありませんか。確か『秋晴れ』とか何とか題がついてゐましたなに足を踏んばつて——」

夫人はかう云つて、兩腕でその踏ん張つた状を眞似るやうにしながら、傍の娘を顧みだ。  
「あら、お母さま。そんなでもなかつたわ。」

冬子嬢は母の話を面白くするための誇張を、抗辯するやうに答へてゐた。

「兎に角版は悪いけれど、家のものだつてことは、みんなよく解るんですよ。」

「そんならお家の人たちを知つてゐる人が見れば、すぐモデルが分つたでせうね。」

んな寫眞は、J新聞で見たやうな覺えはあるが、ちつとも氣がつかまませんでしたよ。奥さんも、その通り太つて寫つてゐましたか。」

黒田が傍から、幾らか抑揚ふやうに、口を出した。

「えい、この通りちやんと寫つてゐましたとも。だから、榎町の伯父さんなどは、すぐに解つたさうですよ。」

夫人は笑つて答へてゐた。冬子嬢も傍から註釋するやうに云つた。

「私、學校で皆に判つて、何か云はれやしないかと思つて、心配してゐた位だつたわ。」

「それで向うでは、貴女がたが何處の人だつてことは、まるで知らなかつたんですよ。」

小野も少し膝を乗り出すやうにして、口を差し挟んだ。

「えい、知らないんですよ。新聞にも何とも書いてなかつたから。たゞ、娘と子供を澤山連れて、みんな日傘をさして歩いてゐたものだから、丁度上野の秋景色を撮りに来てゐた、その寫眞師の目についたんでせう。」

「知つてゐたら、更にいい材料だつたらうなあ。J新聞の寫眞班も氣がきかない。」

黒田が又さう批評した。

「知らないで仕合せ。あんな用意も何もないところを寫されて、麗々しく膝見漆石の家族だなんて出されちやあ、いゝ恥晒しですわ。」

「四人のお嬢さんに着飾らして、曙星の制服を着た二人の坊ちゃんを引連れて、堂々と奥さんが散歩してゐる圖なら、大抵の寫眞班も目につけるでせうね。」

小野も親しきもつた冷かし半分に、かう合禮を打ちながら、自分の心の暗箱の中で、まだ色づかぬ影りした上野の杜の下、青い空を映して清く小波立つた不忍池の畔に、澄み切つた暖い秋の日を浴びて、美しい日傘を翳した令嬢たちの姿を、その地に引いたであらう影までくつきりと、ひそかに想像の乾板の上に寫してゐた。そしてそれだけで何となく、麗かな思ひに包まれてゐた。

「私たち、何もそんなに着飾つてなんぞ、わやしなかつたわ。ね、お母さま。」  
 冬子嬢が又辯論した。が、それはすぐ、皮肉な響をもつた杉浦の言葉に、反駁されて了つた。  
 「着飾つてゐたつてゐなくなつたつて、それだけ深山の人数なら、多数の力だけでも目につきますよ。そ  
 の上着飾らないでも、天の成せる麗質は止むを得ませんからね。」  
 彼は黙つて聞いてゐて、不意によくそんな皮肉な合の手を入れるのだつた。

「あら、そんなこと知らないわ。——兎に角、私なんぞ随分變に寫つてゐるのよ。」

小野はそんな問答を聞き、その姿を想像してゐる中に、ふとその寫眞を見たくなつた。

「で、今、その寫眞の載つてゐる新聞は、お宅に取つてないんですか。」

「え、有りません。そんな新聞の寫眞版なんて、取つて置いたつて仕方がないと思ひましてね。けれど、今になつて見ると、切り抜いて置けば面白うござんしたわね。」

「さうでしたね。でも、さうして確かに新聞に載つたのなら、その原板は、まだ社の方にとつてあるかも知れませんよ。大抵のものは半年と一年取つてあるさうですからね。風景同様の寫眞だから、或ははとつてないかも知れませんが、一つあの社にゐる池田に頼んで、寫眞部で調べて貰ひませう。小野はふと思ひついて、さう云ひ出した。

「え、確かに新聞です。何でも秋の彼岸の翌日ですから、九月の二十四日か五日ですよ。」  
 「若し在つたら、一枚僕も頂きますよ。」  
 「でも在りませすかしら……。」

そんなことで、その場の話は済んで了つたが、それから三日経つて、當時新聞社の記者をしてゐた池田に、杉浦の下宿で落合つたとき、小野はそのことを頼むのを、決して忘れはなかつた。三人は同じ同人雑誌をやつてゐて、杉浦のところ、その當時編輯局みたいなものになつてゐたので、よくそこへ集まるのが常だつた。

「……實はねえ君、面倒だらうが君に一つ頼みがあるんだがね。」

と、彼は杉浦の手前少し恥かしさうに、かう序を見て云ひ出したのだつた。

「何んだい。何か秘密な用か。」

何も知らぬ池田は、強い近眼鏡の後の、奥深々眼を瞬して、さつになく訝りながら反問した。

「うむ、何でもないんだ。實は君の方の社の、寫眞部を調べて貰ひたいんだがね。」

すると杉浦が、急に横合から口を出してきた。

「うむ、さう。何でも去年の九月二十四五日に載つた、『秋晴れ』とか何とかいふ寫眞の、原板

なんだよ。そいつが有るかどうか、聞いて見てくれないか。」

それは別に、意地悪とか何とかいふ程のことではなかつたが、さうなると、小野も疊みかけて、頼まざるを得なかつた。

「そしてね。若し原板が在つたら、そいつを二枚焼付けてくれないか。是非必要なんだから。」  
 「何だい。『秋晴れ』つて？ 何が寫つてゐるんだい。」  
 池田は猶も不審がつた。  
 「なかに、何でもない、上野の景色なんだよ。女の人が三四人、日傘をさして池の端を歩いてゐる寫眞なんだよ。」

「その女つて誰なんだい。」

すると、杉浦が又親しげな意地悪さを以て、はつきり底を割つて了つた。

「なぬに勝見先生のお嬢さんたちなんだよ。それを持つて行つて、小野の奴、うまく歡心を得ようといふんだ。だから構ふことはない。寫眞が在つたら、僕の方へ持つて来てくれ。」

「馬鹿いへ。」

小野は少し赤くなつて、まじ／＼と苦笑する外なかつた。

「さうか。それぢや小野は誰かお嬢さんに參つてでもゐるんだな。」

池田は短刀直入にかう云ひ出した。

「馬鹿いへ。」小野は慌て、正直に打消した。「そんなことがあるものか。たゞ奥さんに、在つたら持つて行つて上げるつて、約束したから頼むんぢやないか。」

その辯疏が、子供らしい程眞顔だつたので、二人はさすがそれ以上擲論ふのはやめた。

「ぢやあ兎に角、調べて見てやらう。そして若し在つたら、そのときはお禮をタンマリ貰ふぜ。」

「いゝとも。だから兎に角、寫眞部の人に訊いて見てくれ。」

それから一週間ばかり経つた或日、小野は又杉浦のところへ行つた。その日例の宿直順に依つて杉浦が勝見家へゆく番に當つてゐたので、小野は杉浦を訪問旁々、間がよければ一緒に勝見家へ行つて見ようと思つて出かけたのだつた。その頃でも彼は、かうして殆ど毎日のやうに、遊びに出かけてゐた。そして小野は杉浦が一人で、勝見家へ行つてゐる日は、何となく漠然と心が落着かなかつた。それで大抵は一緒に行つて、宿直はしない迄も、遊び更かして歸るのが常だつた。

その日もその積りで、彼は誘ひだか誘はれだか分らぬが、伴れ立つてゆきたい氣持で、杉浦を訪れ

たのだつた。

すると杉浦は、小野の顔を見て、にや／＼笑ひながら云ひ出した。

「今日は君が來さうもないから、今出かけようかと思つてゐたところだ。進上物を持つてね。」

さう云ふ彼は、まつたく袴などをつけて、外出の用意を整へてゐた。

「ふうむ。さうかい。だが、進上物つて何だい。」

小野は漠然たる美望を感じて、さりげなくさう云つた。

「うゝむ、何でもない。たゞいゝものなんだよ。」

杉浦は猶意地悪さうににや／＼笑つてゐた。

「何だらうな。」

小野は輕い氣持になれないで、杉浦の嘲弄を眞面に受けてゐなければならなかつた。

「君の知つてゐるものだよ。實はもう僕はそれを今日持つて行つて、勝見家の人たちを喜ばしてやらうと思つて、こゝに持つてゐるんだがね。」

杉浦は懷を面白さうに叩いて見せた。

「ふうむ。」咄嗟に、小野は思ひついた。「ぢやああの寫眞か。——池田が持つて来てくれたんだね。」

「うむ。まあさうかも知れないな。だが、池田の言葉ぢやないが、只ぢや君に渡されないう。僕の手

へ入つた以上、僕に所有權があるんだからな。これは僕が持つて行くよ。」

杉浦は半分冗談らしく云つてゐたが、半分は眞實の氣持で、さう云つてゐるらしかつた。そして實

際、小野が來なければ、自分で持つて行く積りには違ひなかつた。それは何方が持つて行つたところで、別にさう大した手柄といふ譯ではないが、小野にとつては、決して些事ではなかつた。彼は前々から、

ひそかにその寫眞を持つて行つて、彼女たちを歡ばすときのことを、樂みにして待つてゐるのだつた。その心持のために、小野は普通の擲擧以上に、鳥渡ぐつと胸を叩へさせた。

「ふうむ。さうかい。池田の奴、人が頼んだのに、何だつて俺に渡してくれなかつたらう。」  
 出来るだけ軽く云つた積りだつたが、彼の言葉はつい本音に出た。が、その位のことではなかつた。彼は更にもつとわざと意地悪に出た。

「それやあ池田だつて、素直になんぞ渡せるものか。實は昨日社の歸りにわざ／＼来て、寫眞を置いて行つてくれたんだがね。別に君にやつて呉れとも何とも云つて行かなかつたよ。だから僕は今日是从これを持つて行く積りでゐたんだ。」

さう云はれると、まだ／＼擲擧されてゐると知りつゝ、小野はそれに強く對抗し得なかつた。

「ぢやあ、せめてどんな寫眞だか見せろよ。」

「そんなこと云はずに出せよ。」

「いや出さない。見たいんなら向うへ行つて、渡して了つてから見ろよ。」

「そんならもう見ない。」小野は幾らか眞顔になつて云つた。「勝手に君が持つて行き給へ。僕が別に持つて行かなくちやならない譯もないんだから——」

それは小野としては出来るだけ、軽く云つた積りではあつたが、矢つ張り一種の憤りと恨みを含んで出た。

が併し、その位のことでは、むざ／＼折れて了ふ杉浦では更になかつた。

「うむ。よし。それなら兎に角、今日は僕が持つて行くから、一緒に待つて見ろよ。」

「うむ。行かう。」

そんなことで、『それぢやあ俺は行くのをよす。』とは、小野はどうしても云ひ切れなかつた。さういふ風な性格の強弱では、小野はその他の點で幾ら優つてゐても、元から杉浦の敵ではなかつた。

「ぢやそろ／＼出掛けようか。」

杉浦はわざと平氣で、——内心は稍まゐつてゐるらしかつたが、強ひて意地を張り通さうと思つたらしく、にや／＼澁い笑ひを肩間に浮べながら、小野を促した。

小野もさりげなく、立上りは上つたが、それでもひそかなる憤懣に心の底を掻き亂されて、さすがに黙り勝たつた。それでも彼は、あゝ杉浦が強く云ふものの、向うの家へ着く迄には、きつと自分に渡すに違ひないといふやうな氣持もあり、強ひてそれ以上抗つたりするのは、却つて杉浦の意地悪を助長するに過ぎないと考へて、さりげなく抑へてゐたのだつた。

けれどもたうとう、勝見家に着く迄、杉浦はそれを渡さうともしなかつた。小野は心中ひそかに、平かでないものがあつたが、併し、それならばそれでいゝ。」と決心せざるを得なかつた。

で、二人が玄關から通されて、磐子夫人の前へ出た時、小野は挨拶するのを待ち兼ねるやうにしてかう先を越して云ひ出した。

「奥さん。この間の寫眞ね、J新聞社に在りましたよ。池田に頼んだら、持つてきてくれたさうです。」——おい杉浦出せよ。」

杉浦はかう云はれると、小野を顧みて苦笑しながら、幾らか親愛的に、『畜生、よくしてやりやがつたな。』といふやうな面持で、懷中から寫眞を漉々と取り出した。それは頼んだ通り二枚あつた。

「なか／＼よく映つてゐますね。奥さんの『何をするんだ』といふ風に、横目で咎めてゐるやうな顔

「つきまで、はつきり撮れてゐますよ。」  
 彼はそんなことを云つてゐた。

「どれ。」

夫人も乗り出して、それを受取つた。小野もすぐにその一枚を、掠めるやうに素早く取つて、そして初めてその寫眞の面を熟視した。

そこには、丁度東照宮下のあたりと見えて、小野が嘗て想像した通りに、蒼鬱とした杜を少しくボケた背景にして、日傘をさした群像が、横にくつきりとした日影を曳いて、並んで歩いて寫つてゐた。寫眞のことで、日傘の色は解らないが、左端にゐる夫人のだけは、黒くかつちりと濃いのが、その他の令嬢たちののは、いかにも清澄な日を受けて、白つぽく鮮やかに輝いてゐた。中央の日傘の中には、第三番目の令嬢と末の令嬢が、一つ傘を仲よく騎して、足並まで揃へて歩いてゐた。そしてそこが丁度、寫眞の中心になつてゐるので、啞塵の撮影にも似ず、びつちり焦點も合ひ、又傘の中の日光の餘翳を受けて、仄明るく又仄暗く陰影の中に、端麗な秀子嬢のつんと澄ました顔と、悪戯つ子めいた一番末の令嬢のくるくるした眼まで、不思議さうに睜かれて、はつきり印されてあつた。その横手には、又二人の令息が手をつなぎ合つて、これもカメラの方を不審げに覗いたと見え、少し眩しい日に擧めた顔を、無心に此方へ向けてゐた。そしてその右端には、袴を穿いた通學服めいた姿の冬子嬢が、日傘を少し斜にして、それでも少しも顔は隠れずに、足を踏み出した瞬間の態度を、すつかり露出してゐた。が、その顔は、寫眞師の方を見ようか、それとも知らぬふりをしようかと迷ひながら、つい横目でそつと覗つた瞬間に、パチリとシャツターを切られたと見えて、妙な眼つきを作つてゐた。そしてその隅のあたりは、やゝ焦點を外れてゐるために、少しボケ加減に歪んで、實物よりはすつと悪いが

その代り一種妙な味があつて、取り繕はない親しみを感ぜさせるやうに、面白く撮れてゐるのだつた……。

「成程ね。」夫人も見入りながら、感嘆の微笑と共に云つてゐた。「みんな變に撮れてゐるのね。ちゃんとしてゐるのは、秀子ちゃんだけだね。どうでせう。この冬子の撮れ方つたら。——冬子さん、来て御覽なさい。貴女がたの寫眞が來ましたよ。」

その聲を聞いて、奥から冬子嬢と定子嬢とが、聞き傳へて出て來た。

「あら、何時かのが？ まあ、よく在つたのね。」

冬子嬢は寄つて來ながら、まづかう叫ぶやうに云つた。そして母夫人の左側から、争ふやうに覗き込んだ。定子嬢は右へ廻つた。

「冬子さん。」小野は透かします云ひ出した。「僕が発見したんですから、お約束に従つて、一枚は僕が貰つて行きますよ。」

「あら、厭よ。」冬子嬢は熱心に自分の姿を覗き込みながら、鳥渡此方を睨むやうに見て云つた。「だつて、随分厭に寫つてゐるんですもの。厭だわ。こんな寫眞。まあ！ 随分變ね。」

「變でもないでせう。それが眞實ですよ。」

杉浦は傍から皮肉に冷かした。

「あら、まさか。こんなでもないわね。」

「秀子ちゃんが一番よく撮れてゐるわね。」

二番目の定子嬢が、公平な批評の口を出した。

「さう云へば、定子さんは撮れてゐませんね。どうしたんです。」

杉浦は前に見てゐるだけに、すぐ気づいてゐたと見えて、かう云ひ出した。全くその群像の中には、誰か足りないと思つたら、定子嬢の姿が見えなかつた。

「私？」と定子嬢は、少し得意さうに、そして浮き／＼とした笑聲を出して、説明した。「私逃げちやつたのよ。寫眞屋さんが傍からひよいと出てきた時、私すぐさう思つたから、急いで此方へ退いて了つたのよ。よかつたわ。だつて私、いつも悪くばかり撮れるんですもの。」

その派手な顔立ち、舉措と性質の快活さで、非常に目立つて見えるに拘らず、寫眞などになると、眼付などが大きいために、妙に均整を失つて、いつも却て姉妹中で見劣りがするのを、嘆いてゐると聞いてゐた定子嬢としては、それは當然な早業だつた。

「成程ね。でも、よく逃げたものね。」

母夫人も笑つてゐる。

「ほんとですわね。」と、小野もやつと發言權を興へられたやうに、その件について云ひ出した。「さう云へば成程、此方の左手の方から、定子さんのらしい影が、紛れもなく出てゐますよ。此方へ逃げたんですわね。」

「さうよ。お母さまの陰の方へ、すつかり匿れちやつたのよ。——ほんとによかつたわ。」

「私、厭だわ、こんな寫眞。」冬子嬢はそれにつけても、猶さう云ひ出すのだつた。「どうしてこんな寫眞、見付けてなんぞいらしたの。」

「でも兎に角、僕は約束ですから、一枚頂きます。」

小野はさう云ふと、自分の持つてゐた分を、素早く懐中へ入れて了つた。

「あら厭よ。」

「厭だつて仕方がありません。初めつから、是は僕の分として、一枚餘計に焼いて貰つたんですから。」

「お入用なら、もつと頼んで焼かせます。」

「お母さま、眞實？ 眞實に小野さんにやる約束をしたの。」

「あゝ、仕方がないよ。」

「あらア！」冬子嬢は困惑したやうな、睨むやうな顔をして、小野の方を顧みだが、「ぢやあ、別な寫眞を上げますから、それを返して頂戴。そんなの厭ですから。随分變に寫つてるんですもの。」

「眞實ですか。——でも、是でいゝぢやありませんか、自然で……。」

「いけないのよ。もつとちやんとしたのを、眞實に上げますから、ね。それは後生だから返して頂戴よ。」

「ぢやあ眞實ですわね。僕は貴女を信用してお返しします。ようござんすか。」

そんなことで、小野のその寫眞を秘藏しようと思つた願ひも、すつかり空にはなつて了つたが、それだけでも彼は嬉しかつた。そしてその後、すつと後になつてからであつたが、冬子嬢は約束を果して、日比谷の丸木で寫した寫眞を、二枚彼に呉れることを忘れなかつた。併しそれは非常によく、端麗に撮れてゐるにも拘らず、すつかり他所行で親しみがなかつた。そしてそれを出して見る度に、小野はこの新聞社の寫眞と、それに絡る挿話を、懐しく想ひ起すのだつた。

その頃から、小野は贅子夫人の命を受けて、宿直の暇々に冬子嬢の英語の、家庭教師を兼ねることになつた。

當時冬子嬢は、目白女學校の四年生だつたが、もう後一二ヶ月経てば、卒業することになつてゐたので、それより上の學校へ行くべきかどうかを、定めなければならぬ時機に際してゐた。彼女は自分の著書などで、讀ますことを好まなかつたので、大した文學の方面などに向いて性癖もなかつた科か、乃至は音樂學校へでも入る外なかつた。さうしてその何れにしたものかどうかと、夫人も探擇に苦しんで、弟子たちに相談めいた言葉を洩らしたことさへあつた。

が、結局、夫人の女らしい感傷で、何か一藝を身にさへつけて置けば、萬一彼女の身上が悲境に陥つても、食つて行けるといふ理由と、又冬子嬢は幼い時から、兎に角洋樂だけは多少習得してゐて、現に双葉會のピアノ部に通つて、技藝の上でも幾らか見込みがあるといふ話だつたので、音樂學校に入ることに、一應決定したのだつた。

「冬子のはあれで同じボツンくにしても、指先に力があるんで、幾らか本當の音が出るんださうですね。筋も割合にいゝんですつて。」

そんなことを、夫人は娘の稽古ピアノを聴きながら、小野たちに少し自慢らしく云つたものだつた。その上、黒田の養子すべき先の、約婚の人といふのが、その時分音樂學校の、ピアノの三年生だつた。それで彼も、——彼自身の許婚のそんな點に、別に嗜好も何もないらしなかつたが、冬子嬢の音樂學校志望に、第一に賛成したのだつた。

「さうなさい。それがいゝです。——それに何か入學上のことで、解らないことがあつたら、僕の色々聴かせませう。さういふ便宜もありますからね。なあにあの平凡な大人しい女でさへ、兎に角入

つてやつて行けるんですから、冬子さんなんぞは何でもありませんよ。」

黒田はそんな風に勧めた。

小野も勿論心ひそかに、それには双手を擧げて賛成だつた。なぜといふに彼は、冬子嬢が兎も角何年かの間、この上學校生活を續けるとすれば、その間だけは少くとも、彼らと交遊し得る期間が延びる。それが家庭の人となつて了へば、早晚結婚問題が何か起つて、他へ行くか落着いて了ふかである。到底自分などに、貰へるべき氣遣ひはない、とその頃まだ思つてゐた小野は、それだけでも既に賛成だつた。そして殊に音樂學校といへば、更に幾らかロマンチックな色彩を帯びて、彼の好みから云つても、第一に賛成しなければならぬことだつた。

愈々さう定つて、或る日曜日の午後、冬子嬢は當時音樂學校の寄宿舎にゐた、黒田の許婚の人の所へ訪ねて行つた。それより先に、黒田からは既に電話があつて、その人は待つてゐる筈だつた。それ迄、黒田は嘗て一度も、その人を連れて來たことはないし、平素でも、そんな許婚とよく會ふといふやうなことは、黒田の性癖から云つても殆どなかつたので、勝見家の人々や黒田の友人たちにとつても、殆どその人は未知數だつた。それで冬子嬢が會ひに行くといふことは、それ自身小野たちの興味をさへ唆つてゐた。

冬子嬢は學校へ行く時のやうな装で、その午後出かけて行つたが、夕方、薄暗くなる時分に歸つて來た。

「どうだつたえ。」

母夫人は待ちかねるやうに様子を訊ねた。

「え、向うではもうちゃんとして待つてゐて、大變親切に、いろ／＼教へて下さつたわ。」



「黒田の細君になる人つて、一體どんな人でした。」  
 座にゐた小野も、待ちかねてゐたやうに口を出した。  
 「いゝ人よ。黒田さんはあんなに仰しやつて居るけれど、ほんとにいゝ人だわ。黒田さんには惜しい位よ。」

「へゝえ、そんなに綺麗な人なんですか。」  
 小野は更に無遠慮に聞いた。

「それはね、そんなでもありませんけれど、色の白い、可愛らしい方よ。それにそれやあ大人しい方なの。私だつて、他の人に會つたりする時は、大人しい方なんですけれど、もつと大人しい位なよ。」

「それやあさうでせうね。何しろ物干で、卒倒した位なから。」  
 さう小野が云ふと、夫人も思はず笑ひ出した。

「あら、あの方、物干で何うかなすつたの。」  
 冬子嬢は不審がつた。それは不審がるのも尤もだつた。

「およしなさいよ、小野さん。餘計なことを言ふもんぢやありませんよ。」  
 夫人は窘めた。小野は頭を搔くやうにして、首を引込めた。

それは弟子たちの間にだけ知られた、可なり有名な事實だつた。といふのは、黒田は前にも云つた通り、その許婚の人とさう色つばい交渉をすることなどは、決して好まないやうな男だつたし、又その女の人も大人しい人だつたので、嘗て一度も二人だけで、親しく語り合ふといふことさへなかつたが、或時夏休みに、二人が灘の家へ歸つてゐる時、彼の養家は鳥渡大きい酒造家だつた。——或

夜涼みをとるために、偶然二人で物干に上つてゐたが、ふとその場の出来心から、親の許された仲でもあり、何かの序に、鳥渡黒田の方が、色つばい心持ちを感じて、不意に許婚の人を捉へて、急に接吻しようとしたことが、たつた一度あつたさうである。すると、その女の人の方では、平素大人しい人なものだからすつかり、驚いて了つて、卒倒しかけたといふ話を、いつか黒田が皆の前で、面白半分に、又自分の許婚者と自分とが、いかに淡白な色氣抜きの關係であるかを示すために、告白したことがあつたのだつた。それ以來黒田はよく許婚の話が出ると、その物干事件などに絡んで、皆からいやかされたりしたものだつた。——それを云ひ出したので、夫人が止めたのも無理はなかつた。そして夫人は更に用事の要點を云ひ出した。

「で、入學試験のことや何かも、よく聞いて來たかえ。」

「えゝ、聞いて來ました。學科は英語だけで、大抵ナショナル・リーダーの三から出るんですつて。それから後は、譜本を見て唱歌を唱はされるんださうですよ。それにはこの本のを練習して置けばいいつて、黒田さんの奥さんが貸して下さいましたわ。」

かう云つて冬子嬢は、紫の袱紗包の中から、小學唱歌とか何とかいふ、黒表紙の大型な教本を、取り出して見せた。

「さうかえ、それはよかつたね。ぢやあ是から一生懸命それをお復習するんだね。」

「唱歌の方は一人で、譜本を見てピアノを合せながらも、練習が出来ますけれど、私、困つちやつたわ。英語は。——お母さま、どうしませう。逆も獨習なんか出来やしませんわ。」

「いゝぢやないか、そんなら、誰かに教へて頂けば。」と、すぐ小野の方を顧みて、「小野さんでも誰でも暇な人に。——ねえ小野さん。貴方だつてその位の本なら、造作なく教へて下さるでせう。丁度

貴方が一番暇だし、私たちの都合もいゝから……。」

「さうですね。」小野は殆ど思ひがけなくさういふ機会を與へられたのを、感謝しなければならなかつた。「僕でよかつたら。でも、ナシヨナルの三にしたところが、僕にとつちや怪しいものだ。たゞ何なにか六ヶ敷いですからね。」

「でも貴方は英文の方の文學士でせう。」

「だから猶怪しいんです。鳥渡、その任でないですがね。」

小野は見え透いた謙遜をした。他に人がないのなら、止むを得ませんが……

すると、やうやく冬子嬢も云ひ出した。

「私も小野さんなら、一番いゝわ。他の人ぢや厭よ。だから教へて下さいな。それとも御迷惑？」

「いゝえ、そんなことありませんけれど。……それぢや兎に角、教へて見ませう。が、一體この家庭教師を、幾らで雇つて呉れるんです。」

小野は浮々して、嬉しい心持をそんな冗談に紛らした。

「さあね。」と夫人も冗談らしく、「兎に角冬子が無事に入學できたなら、お禮は仰しやるだけ差上げますよ。その代り英語の及第落第は、みんな貴方の責任ですよ。」

「そいつは困るなア。が、まあ仕方がありません。かうなつたら冬子さん、二人で一生懸命やりませう。」

「私、英語はほんとに出來ないのよ。怒らないで頂戴。」

「懐こそ——。」

そんなことで小野は一週の中、殆ど隔々日位に夕食後の暇を見て、冬子嬢の英語の教師を勤めることになつたのだつた。

が、讀本の三といへば、小野も口ではあゝ云つたものの、ひそかに多寡を括つてゐたのが、大間違ひだつた。

或時茶の間の隅で、夕飯の食卓をすぐその儘机に直して、教習をしてゐた時、ふと極く普通の熟語を、熟語だとは氣がつかずに、その儘廻りくどく譯して、それで済ましてゐたことがあつた。それでもどうにか辛うじて、その言葉の意味はとれるので、その場はそれで済んで了つた。

が、その時生憎、少し離れた圍爐裡のところに、同じ弟子の原田が宿直に當つてゐたので、居合せてゐて夫人と雑談をしてゐながら、ひそかに此方の教授ぶりを、觀察してゐたらしかつた。小野もそれを知ると、少しは含羞んでは居たが、別に氣にしてはゐなかつた。どうせ夫人と話をしてゐるのだから、細かい處などには、さう氣を付けてゐる筈もないと思つてゐた上に、熟語だとは氣がつかないから、鳥渡嬢だが、その儘でいゝのだと思つて、さして注意もしなかつた。

するとその次に、教へに行つた時のことだつた。一通り教習が済んで、——その時はもう別に間違ふ處もなかつたので、——それから後、鳥渡嬢問の仕直しをするやうになつた時、冬子嬢は鳥渡嬢巡した後に、突然こんなことを云ひ出した。

「あの、ね。この前教はつたところね。こゝん處にかういふ字があるでせう。これね。この儘一々譯したりしないで、一つの熟字になつてゐるんですつて、『……』つていふ。——原田さんが教へてくれたのよ。」

「あつ、成程、さうですね。」小野は鳥渡、顔から火が出るやうに感じた。彼とても、それを全然知らないのではなく、つい、紛れて了つたのだが、さう云はれると全く恥入る外なかつた。「全くさうでした。どうも気がつかないでゐて、申譯ありません。あゝ、ほんとにさうでした……。」

「それをね。」と、冬子嬢は續けて、小野を慰める積りか、憎らしいといつた風に、猶も云ひ出すのだった。「後で貴方が歸つてから、わざと私ん所へそつと寄つて来て、『冬子さん、小野の譯し方はあれは間違ひですね。念のために辭書を引いて見たら、こゝにも確かにかう出てゐます。』つて、お書齋の大きな辭書まで持つて来て、さう／＼得意さうにさう云ふのよ。」

「だつて仕方がありません。僕が本當に気がつかなくつたんですから……。」

さうは云ふものの、小野も原田の誤譯指摘を、心から恨めしいやうに思つた。

「でも、さうと氣がついたんなら、あの時すぐに、貴方にかう／＼ぢやないかつて、氣さくに云へばそれでいゝでせう。それなのに、そつと注意して聞いてゐて、後からわざ／＼辭書を持つて私ん所まで来てさう大事さうに告口するんですもの。何だか貴方の信用を、陰でなくなさうとしてゐるやうで、私、いゝ氣持がしなかつたわ。だから、『さうですか。どうも有難う。』つて云つたきり、さうよく返事もしなかつたのよ。あの人、いつも陰へ廻つて、あんなことばかりするんですもの。まるで女みたやうだつて、お母さまも仰しやつてたわ。私、だからあの嫌ひよ。」

「併し原田は親切で、さう云つたのかも知れません。」

小野はまだそんなことを云ふ外はなかつたが、併し心の奥では、冬子嬢の言葉以上に、その陰でのやり方を憎く思ひ、それを拒絶してゐる冬子嬢の態度に、恥ぢらひながらも、感謝の念を禁じ得なかつた。

「いえ、あの人貴方が、私に英語を教へたりするのが、羨ましいらしいのよ。それでそんな風に直したりするのよ。自分が教へたいのかも知れないわ。だけどどんなにあの人が英語が上手でも、私、あんな人に習ふのは厭だわ。少し位間違つてゐたつて、貴方に習ふわ。だから、そんなこと氣にしないで、教へて頂戴ね。」

冬子嬢はかう云つて、小野を慰めるやうにぢつと見上げた。

「えゝ、是からはよく氣をつけます。」と、小野はまだ恥辱に惱みながらも、その誤譯指摘が、却つて自分に有利な状態をさへ生んだのを、心中で感謝しなければならなかつた。さうして、それと同時に、原田に對して憎悪と共に、何となく濟まないやうな氣持が、少なくとも理性的に生じて來るのを、現はさずには居られなかつた。「だが、原田君に悪意はないでせう。どうして貴女がたは、さう原田君を嫌ふのです。」

「それには譯があるのよ——。」

と、冬子嬢が話したところに依れば、初め原田は、秀才の好青年だつたので、勝見先生からも愛され、夫人からも十分信用されてゐたので、可なり親しく令嬢たちとも近づき、殆ど令息の家庭教師のやうになつて、勝見家に入入してゐたのであつたが、或る夏、それは三四年前のことであつたが、夫人や令嬢たちと一緒に、鎌倉へ避暑に行つてゐた時、或る夜、皆が寢靜まつてから、冬子嬢が熱く寢苦しいので、眼を覺して見ると、隣室に寢てゐた筈の原田が、眼を見開いた冬子嬢の、すぐ目の前へ近々と顔をさしつけて、覗き込んでゐたといふのだつた……。

「……それで私大變吃驚してね。『どうしたの。』つて飛び起きるやうにしたのよ。するとね、原田さんは急に慌てゝ、『餘り月がよかつたもんですから、今起きて外へ行つてみたんですが、その序に貴女

が寝てゐるか、どうかそつと見に来たんです。』つて云ふんですもの。私、何だか怖くなつちやつて、お母さまに後でさう云つたのよ。それでお母さまも大變お怒りになつて、あらにはさうと云ひませんでしたけれど、それからすつかり信用をなくなして了つたのよ。その上あの人と來たら、何から何まで神経質になつて、うぢ／＼氣を廻してばかりゐるんですもの。皆嫌ひになるのは當りまへですわ。」

「へエ、さうですか。」

小野もさう聞いて、思ひ當る節々がないではなかつた。何でも誰かから噂に聞いたのであるが、原田が冬子嬢に接吻しようとしたとか、何とかいふ話も前に聞いてゐた。そして原田自身の口からも、なかつたが、品隋したのを想ひ起した。そして原田も、恐らくは境遇が許すならば、小野と同じやうに、ひそかに冬子嬢に熱い思ひを寄せたに違ひなからうし、嘗ては戀したこともあつたに違ひないと想ひ及ぼさざるを得なかつた。今では彼も、もうある同年輩位の女教師と結婚して、その細君の貢ぐ學資に依つて、大學に通つてゐる身上であつたが、さうなれば少なくとも冬子嬢に近づく男性を、嫉妬と羨望なしには見ることが出来ないと推察された。さう思ふと、小野はひそかに、原田を憐むやうな、又同情に堪へぬやうな、それで優越を感じるやうな、妙な感じに囚はれない譯にはゆかなかつた。兎もあれ、その家庭教師の職は小野と冬子嬢とを、益々親しくする仲介となつた。學習そのものになかつた。小野にとつては、それは勿論ひそかな喜びであり、待ち遠い楽しみであつた。或時は故先生の書齋で、又或時は彼女たちの勉強部屋になつてゐる離室で、その後は近くに外の人がゐるのを、

原田に懲りた例もあつたので、二人とも避けるやうにさへなつた。別に意味のある譯ではなかつたが、かうして二人はよく二人だけで話し合ふ機會を、半ば公然と許されてゐたのである。

冬子嬢はよく學校の話や、親友の噂や、自分の性癖などについて、斷片的にだが話した。

「……私、是で心は随分強情ないけない女なんですけれど、外へ出るとそれや臆病で控へ目なよ。だから學校の先生になんどもよく云はれるのよ。貴方は誰か知つてゐる人はつて云はれた時に、知つてゐる癖に、いつも手を擧げないつて。さういふ所は私案外素直でないのよ。」

小野は又小野で口下手ながらに、自分の境遇や友達の話などを、彼女に解る範圍で語つたりした。かうして小野の心は、いやが上にも彼女の方へ、引寄せられずにはゐなかつた。その點に於て、彼は馨子夫人の信頼を、ひそかに裏切つてゐる譯ではあるが、夫人にしても又ひそかに、二人が何となく近寄つてゆくのを、許してゐるやうな態度もないではなかつた。で、若しこの事に對して、責を負ふべきものとすれば、夫人も亦一半を負はねばならぬ人に、違ひないのであつた。

若い令嬢の家庭教師に若い青年、それは又餘りに見え透いた危険なる境遇でなくて何であらう！悲劇の因は殆どそこに醸されたのだつた。

### 三

かうして小野の冬子嬢に對する戀は、もう摘み取りうべき萌芽でなくして、全く動かし難いものとなりつゝあつた。さうして又一方では、馨子夫人の信任も、今は益々彼の上に重く置かれるやうになつて來た。彼が前に、夫人の特別の使命を帯びて、釋宗澤老師を鎌倉に訪ねたが、今度は又それとは異ふが、それに類した一事件の處理を、祕密に頼まれるやうにさへなつた。

或日、それは先生の七々日を過ぎて、間もない頃だったが、下宿に居る小野の所へ、突然又勝見家から電話がかゝつて来た。丁度杉浦も遊びに来てゐる時だった。小野はそれをふと又冬子嬢からのので、居ないことを想ひ起しながら、然しすぐに其後から、冬子嬢ならもう其時間には學校へ行つて屋に置いたまゝ、取りあへず電話口へ出てみた。

すると其處の電話口へ出てゐる聲は、女中のそれではなかつた。

「もし、小野さんですか。……私ですよ。馨子ですよ。」

「あゝ、小野は夫人自らが珍らしく、いきなり其處へ出てゐるのに、驚きかつ恐縮した。「奥さんですか。失禮しました。——何か御用ですか。」

「え、あのね、貴方鳥渡お話ししたいことがあるの。貴方今お暇ですか。」

「お伺ひしませうか。」

「さうですか。それならね。少し内密に貴方にだけお頼みしたいことがあるんですが、家では少し都合が悪うござんすから、鳥渡外へ出て来て下さらない？」

「え、何處へでも参ります。」

小野は夫人の、特別な願ひといひ、わざ／＼餘所へ出て来いといふのから、一體用事といふのは何だらうと思つた。何か重大な家庭の事件の處理か、でなければ自分に對して、何か特に委託があるのだと考へると、彼の胸は一種の期待にときめくを感じた。

「ぢやあね。私が貴方の下宿へ行つてもようござんすけれど、それではひよつと人目にたつといけま

せんから、貴方の方から一つ、赤坂見附の處まで来て下さいな。私、これから丁度、豊川様へお詣りに行きますから、すぐ其處で赤坂見附の停留場へ行つて、貴方の來るのを待つてゐますわ。だからすぐ来て下さい。」

「え、ぢやあすぐ参ります。」

「それから此の話は、誰にも知らせないで頂戴。私から電話がかゝつたことも、ね。知れると後で又五月蠅から。」

「え、畏まりました。が、今丁度僕ん所へ、杉浦が来てゐますから、お宅から電話がかゝつたことだけは知れてゐますよ。」

「あらさう。杉浦さんならかまひせんわ。でも私から直接かゝつたとは云はないでおいた方がよろござんすよ。杉浦さんなら、後で知れてもかまひせんけれどね。兎に角今は、貴方一人の胸に收めて置いて頂戴。」

小野は夫人から、さう祕密にされるのを要求され、ばされるだけ、事件が何だらうといふ興味と、夫人の特別な信頼に對する喜びとを覺えない譯にはゆかなかつた。

「え、承知しました。御心配には及びません。」

「では待つてゐますよ。」

夫人はそれで電話を切つた。小野は部屋へ歸るとすぐ、杉浦にはたゞ勝見家から、用があるから来いといふ電話がかゝつたから、是から鳥渡出かけて來ると云つて、そして杉浦と一緒に戶外へ出た。

「奥さんが何か内密に用があるんださうだよ。何だらう。」

小野は杉浦に對して、すつかり匿し立をすることが出來ないので、そんな風にだけは知らした。そ

れでない、又杉浦を置いて一人で行くのが、何となく気が咎めたからだつた。

「さうかい。何だらうな。まあ行つて来るがいゝさ。」

小野は杉浦と別れて、一人で電車に乗つた。彼の心持は、何となく漠然とした期待で、満ち満ちてゐた。そして何となく秘密に姉にでも行くやうに、わくわく胸を騒がせてゐた。夫人と姉。そんなことはまるで兩立しないに拘らず、彼は自分のひそかに思つてゐる人の母から、又尊敬すべき先生の夫人から、さうまで信頼を受けてゐるといふことだけで、もう何とも云へぬ仄かな嬉しさを覚えてゐるのだつた。

日比谷で乗り換へて、赤坂見附で下りると、もう夫人が先に來て、向うの飯田橋行の停留場のところに人混みから少し離れて、此方を見ながら立つてゐた。黒つぽい羽織に肥つた身を包んで、夫人の姿はすぐ判然と小野に分つた。

彼は電車線路を横ぎつて、急いで其方の方へ歩き近づいた。そして二二間前まで來ると、帽子を取つて會釋しながら、

「よほどお待ちになりましたか。」

と言つた。何だか息ぎれがして、胸の動悸はなぜともなく止まらなかつた。

「いゝえ、そんなでもありませんでしたよ。十分位なもんでせう。」

「さうですか。どうも済みませんでした。」

小野は夫人に對しては、親愛と共に恭敬を忘れなかつた。

「いゝえ、それより貴方の方こそ、わざわざ呼び出したりなんぞして、済みませんでしたね。貴方ほんとお暇？」

二人は親子ともなく、姉弟ともなく、又勿論戀人ともなく、又夫人と書生といった形でもなしに、ごく自然に寄り添うて、何處ともなく歩き出してゐた。

「えー——。」

「そんなら日比谷公園の方へでも、ぶらぶら歩いて行きませうか。貴方歩くのお厭。」

夫人の言葉は、併しながら親愛に満ちてゐて、いつもより優しいやうに小野には響いた。

「いえ、何處へでも御一緒に歩きませう。」

「さうですか。ではぶらぶら一緒に歩きながら、お願ひのことをお話しませう。家でも餘所へ行つても、聞かれると五月蠅うござんすからね。」

夫人は又繰り返してさう云つて、人の往來のさう激しくない、三宅坂の道隅の方へ、小野を導くやうに誘つた。

「何ですか。伺ひませう。」

其處のお濠に面した坂道には、片側の櫻の並木が疎に立つてゐた。そして冬にしては穩かな、少し眠たげな水蒸氣に満ちた日影が、ぼんやり木立の影を敷いてゐた。二人はそれを踏んで、靜かに話しながら歩いて行つた。

夫人の話といふのは、かうだつた。それは小野が想像してゐたやうな問題とは、まるで懸離れてはゐる、謂はゞもつと輕いが、面白い問題だつた。

……その初めは、先生が死んでから、確か初七日の日だつた。二人の粗末な黒衣を着た、若い二十五六の僧が、勝見家へ訪れて來た。取次に出てみると、それは先生の舊知の者だといふので、早速座敷に通された。

其僧といふのは、何方かといへば敏捷さうな、黒い小柄な顔立で、さう卑しい風體では勿論なかつたし、先生は昔から禪僧を好きで、生前なども神戸のある寺から、二人上京して先生を訪ねた若い禪僧を可愛がつて、幾晩も泊めてやつたり、その修行の話などを聞いて、喜んでをられた位だつたので、さういふ舊知の僧などといふものは、當然在りさうな話だつたので、誰も疑ふものはなく、喜んで座敷に通したのだつた。

すると、彼の僧は、取りあへず先生の寫眞に對して、恭しく讀經禮拜した後、殆ど間は語らずに、自分の身上を語り出した。それに依ると、彼はもと一箇白面の書生だつたが、ある時人生上の問題に煩悶して、日出新聞社の樓上に、先生を訪ねて救ひを求めた。すると先生の云はれるには、それならばまづさし當り、禪の修行に志したらよからうといふので、その上若干の金まで與へて、越前の永平寺へ行けと諭してくれたのださうである。

で、彼はその金を持つて、永平寺に赴き、其處の禪弟子となつて、もう數年修行を積み、鬼に角それに依つて一廉の禪僧となつたので、今度は行脚旁々、寺を出て東上して來たといふのである。すると、彼は途中濱松に於て、偶然新聞を見て、先生逝去の報に接した。それで、これは普大恩になつた先生のことであり、又東京へ出たら、訪ねてお禮の一つも述べようと思つてゐた際なので、非常に驚き嘆き悲しんで、すぐにも飛んで來ようと思つたのであるが、如何せん無一文の雲水の身では、汽車に乗ることも出來ず、止むなくそれから只管道を急いで、やつと今東京まで、辿りつくくなり早速伺つたといふのである。

それを聞いてゐたものは、夫人も弟子たちも、一樣に此の思ひがけぬ珍客に、感激して了つた。そして今更ながら故先生の遺徳を仰ぐと共に、此の僧の濱松から歩いて來た勞に對して、皆は何を措い

ても厚く情はなければならぬのを感じた。腹が減つたらうといふので、早速膳部が選ばれた。而して其間にも、尊敬の目を以て、弟子たちは殆ど英雄を迎へるやうに、色々な質問や談話をしかけた。「先生も、私がお會ひした頃とは、大分お變りになりましたな。」其僧は、經机の上に掲げた先生の寫眞を見ながら、そんな風に懐しげに云つてゐた。「前からこんな髭だつたでせうか。」

「いえ、違ひます。前にはピンとした髭でした。」  
應待に出た弟子たちは、そんな風に應じてゐた。

「さうでしたね、確か。——それにしても随分お齡をおとりになりましたな。これではまるで、お會ひしても分らなかつたかも知れません。随分古い話ですからなア。」

「一體、何時、何處でお目にかゝられたのです。」  
弟子の一人が、決して穿鑿的にはなく、寧ろお世辭で話を進めるために訊いた。

「さあ、私の二十歳前後でしたから、もう彼是、六七年になりますかなア。いや、もつと前かも知れません。何でも先生が、日出新聞へお入りになつた時分でしたよ。場所も確か、日出新聞でつたと覺えてゐますが……。」

「さうですか。はア……。」

そんな話も、先生の遺徳に對する感激と、其僧に對する尊敬で、別に怪しまうとしなかつた。

そして勝見家では、鄭重に饗なした上、十圍ばかりの布施をさへ包んで、其日感謝して彼を返した。それから其僧は、二七日にも來て、他の、釋宗澤師の世話で、小石川の有名な某寺から來た僧に交り、其末座ながら讀經も勤めれば、禮拜も立派にやつて、終ひにはやはり同じやうに、過分な布施を受け歸るのだつた。それは三七日にも、埋骨式にもさうだつた。そして殆ど例のやうになつて、厚く待

遇されてゐた。

ところが、其年の『太陽』の新年號に、編輯者から頼まれて、門下の米田氏は故先生の追憶といふやうな一文を載せた。そして其中に、いろ／＼先生の生前の德行や逸話を連ねた末、先生が禪僧などの生活を好いた例として、又よく他人の世話を見た例として、氏は其僧のことを、挿話的に書いて置いた。恰もそれが其文章のヤマでもあるやうに、細かに感動的に書いたのだつた。

すると、それを偶然有馬王生氏が讀んだ。有馬氏は、兄弟三人とも、有名な藝術家として立つてゐる人であつて、豫々濠石先生には好意を持つてゐるのだつたが、其追憶文を讀んで、不思議に思つた。といふのは、氏らは其嚴父——郵船會社の社長などをしてゐた有名な實業家——を、濠石先生の死ぬ少し前に、喪つてゐた。そして其葬式の後、やはりある一人の若い僧が現はれて、自分は嘗て其有馬氏の嚴父に、大變厄介になり、何かの折に佛教の爲めに、多大の寄附をして貰つた者であるといふので、恭しく供養した上、禮を貰つて歸つたものがあつた。そして其際、やはり永平寺にもゐるものであるが、有馬氏の場合は濱松でなく、静岡で計を聞き知つて、やつぱり歩いて來たといふのだつた。

それが餘りに似てゐるので、有馬氏も變に思つた。そして其旨を、猶詳しく聞き糺さうとして、米田氏に手紙で云つて來た。それで米田氏も、ひそかに驚きかつ怪しんで、有馬氏とも會見し、よく話し合つてみると、どうやら其言行のみならず、人相まで似てゐるらしいといふことになつた。それで、置けないといふので、其僧が果して同一人かどうか、又同一人だとすれば、果して贗物かどうか、よく調べてみなければならなくなつた。そしてもし眞物で、先生の葬式を種に、うまく騙りに來たものとすれば、それにまんと引つつかゝつた一家の人々や、門弟たちこそ馬鹿な役廻りに違ひなかつた。そしてそんな神聖なものを利用して、まんと詐欺を働いてゐる男こそ、見やうによつては憎

んでも猶餘りあるものに違ひなかつた。——米田氏はそのことを、ひそかに夫人に告げて、忠告を與へたのだつた。

「……でね。あの坊さんは今度の月命日にも、來るつていふ約束してありますからね、明日きつと來るに違ひありませんよ。もし贗だとしても、まだ疑はれると思はないから、きつとやつて來ると思ひます。だから、そしたら貴方が出て、一つ會つてみて、嘘かどうか調べて下さいませんか。私、もう會ふのも何だか、氣味が悪くなつて來ましたからね。お頼みといふのは、實はそのことなんですよ。」

夫人はかう云ひ終つて、一まづ言葉を切つた。

「そんなことですか。そんなことなら、いつでもして上げます。」

小野も自分の豫想には外れたが、用件が妙な用件なので、微笑を浮かべながら喜んで承知した。

「何だか探偵みたいなこと、貴方だつて嘘お厭でせうけれど、一つ私のたつてのお願ひだと思つてやつて下さいな。私、こんなことをお願ひ出来るのは、貴方より外にはないんですからね。」

「いえ、何でもありません。奥さんの爲めなら、どんなお役にでも立ちたいと思つてゐるんですから。」

小野もさう云はれると、心からそんなことを云つた。

「ほんとに私貴方だけを、頼りにしてゐるんですからね。そしてこのことは、米田さんと大寺さん以外には、少しも知らしてないんですからね。其積りで貴方に任せますから、もしあの坊さんに會つてみていよいよ贗だと分つたら、後の難儀の起らないやうに、一つうまく丹附けて下さいな。貴方一人で秘密にね。でないと又、いろいろ他のお弟子たちや、先生の友人の方なぞの口の端に上つて、いろいろうるさいことを云はれますからね。」



「それは私も出来るだけのことを致します。」  
 「何しろ先生がお亡くなりになつてから、私一人だもんだから、いろ／＼先輩の人たちも、此方を心配して下さるんでせうが、何かと口出しをして来て困るんですよ。こんなことがあると、又あの奥さんは馬鹿にされたなどと、後指をさうれでもしては厭ですからね。——ほんとに何でも彼でも打ち明けて、内輪に相談が出来るのは、貴方だけなんですもの。」

夫人は幾らかヒステリカルに、そんなことを小野に訴へた。先生の逝去後、いろ／＼面倒なことを云ふ友人や門弟の間に挟まつて、さすがに氣丈な磐石夫人も、そんな氣持になつてゐるのだつた。小野は其夫人の心持が、幾らかヒステリックであると知りつゝ、其信任の言葉には、涙ぐましい程感激せざるを得なかつた。

「え、畏まりました。是からも私で出来ることなら、何でも致します。」

こんなことを話しながら、二人は人通りの少ない濠洲を、たうとう日比谷公園の處まで歩いた。夫人も小野も、何となく心を盟ひ合つたやうな軽い興奮で、疲れも時間の經つのも、殆ど知らない位だつた。

かうしてその日は其儘、小野は夫人と別れて、信賴されたる喜びを、胸一ぱいに抱き締めながら、冷たい下宿へ歸つた。

その翌日、先生の命日の日には、午前中に例の僧が來るといふので、小野は早くから勝見家へ行つてゐた。そして彼の來るのを、今か／＼と待ち設けてゐた。ひよつとすると、もう露顯を覗ぎつけてするとやがて、十時頃になると約束通りにその僧は、——片桐といふ名だつたが、勝見家の玄關に

現はれた。

「片桐さんがいらつしやいました。」

何も知らない女中は、さう書齋に待ちかまへてゐる小野に通じた。

「あゝさうですか。ではどうぞ通して下さる。」

それを聞くと夫人は、苦笑するやうな眼付で合圖をして、そつと立つて奥の間へ行つて了つた。

小野は鳥渡居ずまひを正すやうな心持で、少し胸をどき／＼させながら、一つは探偵の興味に微笑んで、粗上の魚ともいふべきその僧の入つて來るのを待つた。

僧はいつもの通り、黒い粗末な衣をつけ、寧ろ可愛らしい小柄な顔に何の疑念も浮べないで、平氣にひよこ／＼と入つて來た。

「やあ、よくいらしつて下さいました。」

小野は鳥渡唾を飲んで、出来るだけ平然と迎へた。

「いや、失禮——。」

僧は、平氣で設けの座にのいた。小野には、この男がそんな騙りだとは、——それは見やうに依つては、寧ろ愛すべき騙りかも知れないが——到底思はれなかつた。が、併しさう思つて見ると、禪僧にしては少しきよ／＼過ぎるし、又其敏捷さうな小柄の眉宇には、狡猾らしい抜け目なさが潜んでゐるやうに思へた。が、いきなりその場で、小野は聞き糺すことなどは、到底出来なかつた。

「其後如何です。」

そんなことを、さし當り彼は僧に向つて云ふ外なかつた。

「いや、相變らずです。寒さは少し緩んだやうですが、東京も随分寒いですな。尤も吾れ／＼はさ

う大して苦にもしませんが——。」  
 僧の方でもそんなことを云つてゐた。

「……では、兎に角、御經を願ひますかな。」  
 小野は是が贖物だつたら、先生の靈はそのお經を、何と聽かだらうと思つた。そして贖物ならば一

も二もなくすぐ糺明して、お經なんぞ讀ませないやうにするのが、先生に對する禮かとも思つたが、すぐ聞き直つて、勝見家の中でそんなことを荒立て、は、何も知らぬ家人や女中の手前もあり、甚だ工合が悪いと考へた上に、又先生の靈も、贖物なら贖物として、苦笑してお許しになるのみか、或いは面白がつて、お聽きになるに違ひないと思つて、さう促したのだつた。

「今日は奥さんは？」

併し僧はすぐ讀經を始めずに、聽かす相手欲しげに、かう訊いた。

「奥さんは少しお加減が悪くて、今日は奥に臥せつておゐです。貴方がおいでになつたら、よろしくとのことでした。ですからどうぞ御遠慮なく、お看經をなすつて下さい。それから二人で、お墓の方へお詣りすることにしませう。」

小野はひそかに、さういふ手筈に定めてゐたので、猶もそんな風に勧めた。

「ぢやあ、さう致しませうかな。」  
 と、僧は衣を正して、そして先生の佛前に坐つて、傍で小野が注意深く聞いてゐるとも知らず、恐

らく奥に居る夫人の耳にも響けといつたやうに、大聲で經を誦し始めた。

併しその經は、もう前に夫人も氣づいてゐたことだが、例の宗澤師の方の世話で、白隠寺から來る僧達とは違つて、漢音か梵音かの分らないのではなく、和譯された様な意味の分るのだつた。

「は、あ、是は鳥渡經を聞き齧つた、眞つ赤な贖物かも知れないな。」  
 そんな風に小野は思つて、猶もひそかに注意しながら、その經の終るのを待つた。

やがて彼はやうやく誦經を終つた。そしていつもと同じく、殊勝げに禮拜して、もとの座に戻つた。

「御苦勞さまでした。ぢやあ、是から一つお墓の方へ、お伴するとしませうかな。」  
 小野は待ち兼ねるやうに又促した。

「ぢやあ、さうしませう。」  
 僧は此方の氣のせぬか、何となく物足りなげだつたが、さう答へて座を立つた。

かうして小野は、兎に角その僧を、戸外へ抜き出した。出て見ると日は、風もなく晴れてゐて、途の早稲田の裏町は、埃もなく澄んでゐた。何だかそんなことをするより、呑氣に話でもしながら、歩くのが相應しい天氣だつた。

途々小野は、どういふところから、ひそかなる訊問を進めようかと、思ひ惱みながら並んで歩いた。初めは二人とも、取りとめのない世間話などを、他意なく交してゐた。

「……東京では貴方は、一體何處にゐらつしやるんです。」  
 彼はやうやく話の序をみつめて、かう氣づかぬやうに質問し始めた。それは勿論、ごく自然だつたので、僧の方でも警戒といふ警戒は少しもしなかつた。

「今ですか。今は向島のある寺に厄介になつてゐます。其處には前から知つてゐる仲間が居ますんでね。」

「あ、向島ですか。いゝ處に居ますね。あんな處にも禪宗の寺があるんですか。」  
 その問も更に自然だつた。

「えい、在りますとも。あの牛の御前の後の方に、小さな寺があるんですよ。」  
 「かう見たところ、貴方がたの禪僧の生活も、呑氣でいゝでせうな。」  
 「いや、此の道に入つてみると、なかく修行は苦しいですよ。でも、私などは、もうさういふところはどうにかかうにか、通り過ぎて了ひましたがね。かう馴れて了ふ迄は大變です。ほんとは、何にもない境涯なんですからね。私などはその寺に居ると、今でもたつた一枚の布團に包まつて寝るんですよ。そして起きれば、かうして出て歩く外、毎日坐つてゐるんですよ。その代り呑氣といへば呑氣です。——どうです。貴方がたも一つこの道にお入りになつては。漆石先生なども、此道には大變興味を持たれて、前には坐つたことがあるさうぢやありませんか。貴方はそんなお心持はないんですか。」  
 「さあ、僕も禪ならば、鳥渡やつて見たい氣がするんですが、どうも所謂野狐禪的になりでもしては大變ですからね。」

「そんなことはありませんよ。きつと何かの役に立ちますよ。」  
 小野は心中、少しくすりと笑ひながら、さりげもなく猶も相手にならなければならなかつた。  
 「それやア僕だつて、禪と東洋の藝術との間には、深い關係のあることも知つてゐますし、是でも又幾らか禪機といふやうなもの、心得てゐるつもりですがね。何しろ今から煩惱を斷つちや詰りませぬよ。僕などは是からですからね。」  
 「それはさうかも知れませんが、まあ一つ面白半分にも、やつてみて御覽なさい。いつでも手引きはしますよ。」  
 「ぢやあ貴方のお寺へ、遊びに行つてようござんすか。」

小野はすかさず機を捉へたやうに、かう衝つ込んでみた。  
 「えい、ようござんすとも。いつでもいらつしやい。——尤も今居る寺は、名もない小さな寺ですから、參禪の様々なぞも、貴方がたには面白くないかも知れませんが、二三日經つと、私も鶴見の總持寺の方へ參りますから、お暇の時にいつでもいらつしやい。」  
 「總持寺へ行つて、貴方の名をいへば、すぐに分りますか。」  
 小野は更にもう一步進んだ。居所を曖昧にするのが、何よりも怪しいと、まづ最初に睨んだのだつた。

「えい、多分わかるでせう。けれどそれで分らなかつたら、私は大概彼處へ行けば、焚炊寮に居ることになりませうから、其處へ片桐つてさういつて訪ねておいでなさい。——えい、まあ炊事係といつたやうなものを、やらされるんですよ。」  
 さうと聞けば、滿更嘘でもないやうに思へた。  
 「さうですか。そんなら是非その中に一度伺ひます。」  
 そんなことで、早稲田の裏町を通りながら、二人は其處から雜司ヶ谷の方へ、目白臺を女子大學の前へ上つて行つた。どうしても、それまでどうもうまく直截に、小野には云ひ出しにくかつた。そしてその坂道にかゝつた時だつた。小野はふと、この上の女學校に、今時分冬子嬢は、授業を受けてゐるんだなと思ひ起した。そして、それに勇氣づけられたのではないが、彼は漠然と、夫人から受けてゐる自分の使命を思ひ直した。そして、そんな氣の弱いことをしてゐないで、直截に事を片付けて了へ、その方が自他の爲めだと、と初めて其處で意を決する氣になつた。

僧はと見れば、丁度話が途斷れた後で、黙つて少し喘ぎ氣味に、あの坂を上りつゝあつた。

「えい、在りますとも。あの牛の御前の後の方に、小さな寺があるんですよ。」  
 「かう見たところ、貴方がたの禪僧の生活も、呑氣でいゝでせうな。」  
 「いや、此の道に入つてみると、なかく修行は苦しいですよ。でも、私などは、もうさういふところはどうにかかうにか、通り過ぎて了ひましたがね。かう馴れて了ふ迄は大變です。ほんとは、何にもない境涯なんですからね。私などはその寺に居ると、今でもたつた一枚の布團に包まつて寝るんですよ。そして起きれば、かうして出て歩く外、毎日坐つてゐるんですよ。その代り呑氣といへば呑氣です。——どうです。貴方がたも一つこの道にお入りになつては。漆石先生なども、此道には大變興味を持たれて、前には坐つたことがあるさうぢやありませんか。貴方はそんなお心持はないんですか。」  
 「さあ、僕も禪ならば、鳥渡やつて見たい氣がするんですが、どうも所謂野狐禪的になりでもしては大變ですからね。」  
 「そんなことはありませんよ。きつと何かの役に立ちますよ。」  
 小野は心中、少しくすりと笑ひながら、さりげもなく猶も相手にならなければならなかつた。  
 「それやア僕だつて、禪と東洋の藝術との間には、深い關係のあることも知つてゐますし、是でも又幾らか禪機といふやうなもの、心得てゐるつもりですがね。何しろ今から煩惱を斷つちや詰りませぬよ。僕などは是からですからね。」  
 「それはさうかも知れませんが、まあ一つ面白半分にも、やつてみて御覽なさい。いつでも手引きはしますよ。」  
 「ぢやあ貴方のお寺へ、遊びに行つてようござんすか。」

「ときにねえ、丹桐さん。」小野は突然、思ひ切つて口を切つた。「貴方はあの有馬といふ人を、よく御存じでせうね。」

「有馬？」僧は突然さう云はれて、少し面喰つたらしく、半眼にちよいと此方を窺つたが、小野の様子に少したゞならないのを見ると、微かに眼の中で慌てた。そしてきよと「と急いで目を伏せながら、「有馬つて、誰方でしたつねえ。」

「この間お亡くなりになつた、有馬毅氏ですよ。番町の——御存じでせう、貴方はあの方に、大變御厄介になつたといふぢやありませんか。」

小野は殆ど確信をもつて、斷乎と強くかう云ひ切つた。  
「有馬と、……存じませんねえ。やつぱり濠石先生のやうな方ですか。」

僧はまだ併しさう白を切つたが、打見やると、さすがに此方は見得なかつた。

「いえ、實業家です。あの、郵船會社の社長か何かしてゐられた人ですよ。知らない筈はないでせう。貴方はあの人の葬式にも、行つてゐたぢやありませんか。僕は、實はあの人の息子さんで、やつぱり小説を書く王生といふ人と懇意なもんですから、よく貴方のことを聞いて知つてゐるんですよ。」

かうまで云はれると、さすがに僧も少し參つて、誤魔化すやうに云ひ出さなければならなかつた。  
「あゝ、あの有馬さんですか。あの方なら知つてゐます、さうですか。はゝア。……」

「それに貴方は有馬さんへ行つても、又濠石先生のお宅へ來ても、同じやうなことを云つてゐますね。あれはみんな嘘でせう。貴方が拵へたこととせう。」

小野はもう、その場の僧の様子で、殆ど紛れもなく見究めがついたので、かう、今度は幾らか語調を柔かく云ひ出した。

「……けれども、有馬さんに御厄介になつたことは、全くなんです。」

「さうですか。いや、それならばそれでもいいです。だが、貴方も拙いことを云つたものですね。兩方に同じやうなことを云ふなんて、僕は有馬さんから、その話を聞いた時から、さう思つてゐました。併し兎に角、やつちまつたことは、仕方がありません。が、このことを知つてゐるのは、今云つた有馬さんの息子さんと、僕つきりですから、僕は何とかして是を内分に收めようと思つて、貴方の時に忠告しよう、それでわざ／＼今日も、二人つきりで、此處へ來たんです。どうです。貴方もいゝ加減に、今のうちにあんな悪戯をおやめになつたら。今までのことは、僕一人の腹の中に、すつかり收めて置きますからね……。」

二人は丁度坂を上りきつてゐた。そこで小野はひとまづ、反應を見るやうに言葉を切つた。彼は僧が、何とか云ひ出すかと思つてゐたが、が、なかく何とも云はなかつた。そしてたゞ、唇を心持嚙むやうにして、前方の在らぬ方向をぼんやり見ながら、僧は少し黒い顔の色を變へて、黙りこくつて歩いてゐた。それ以上、小野も強ひて、自分を強要はしなかつた。事態はもう明白だつた。小野はただ僧が、どういふ態度に出るか、衝き倒して逃げでもするかと、少し用心して、待つてゐたのだつた。

二人はその儘黙つて、並んで女子大學の横手を、淋しい生籬の多い徑へと出た。  
と、突然、その時まで黙つて、又すつかり伏目にはならず、に、さればといつて小野の方も見ないで、正面の方向を、考へに沈んだやうに見てゐた僧は、急に此方を振りむいて、さうして心の底から出たやうに、

「世間つていふものは、廣いやうで狭いもんですなす。」  
と、長大息するやうに言つた。それが彼の、たつた一言の自白だつた。が、その言葉の中には、恐

らくは百言を費して、厭に悔い改めたらしく自由する言葉よりも、ずつと無邪氣で、本心から出た響きを持つてゐた。

「え、ほんとにさうですなあ。」

小野も心から、さう云はれると微笑した。彼にはもうそれ以上、強く答めることなどは、到底出ないもんですなあ!」聞きやうに依つては、この上なく横着に聞えるかも知れぬその一言も、小野には全くそれに違ひないと、心から微笑されたのだつた。

しばらく行つてから、今度は小野が結論するやうに云つた。

「兎に角、このことは前にも云つた通り、僕と君とだけの、内分に済まして置きます。だが、兎に角、君の跡見家の人々に對してやつたことは、人間の一番清く高い心持を、うまく悪用したんだから、罪悪には違ひありませんよ。だからその罪だけは、是から先生の墓の前へ行つて、よくお詫をなさい。さうして今後、こんなことを決してしないと仰しやるなら、僕も是以上何とも云ひません。答めるところか、僕は君を面白い人だと思つて、友人になつてもいいんですよ。だからもうそんなに、氣になくてもいいです。さあ早く先生の墓へお詣りして歸りませう。」

かう云つて、二人はもう訊問者と被訊問者でなく、相並んで雑司ヶ谷の墓地へ入つて行つた。僧も初めはさすがに、物も云はずに立てゐたが、その中に、又隔意なく色々な話をし出した。小野はそれつきり、もうその問題には觸れなかつた。

僧は、やがて先生の墓の前に立つて、別に悪びれもせず、聲高々と例のお経を上げた。そして心を籠めて長い禮拜をした。

小野は微笑を以て、それを傍から眺めてゐたが、その終るのを待つて、一緒に墓地を出た。

僧とは普羽の通りを歩いて、そして江戸川終點の處で別れた。別れる時、彼は小野に向つて、「左様なら。どうも濟みませんでした。そんならどうかお暇だつたら、總持寺の方へ遊びに来て下さい。焚炊寮ですよ。」

と云つて、親しげに挨拶して行つた。

小野は早速歸つて、笑ひながら夫人に其顛末を復命した。すると夫人は、一部始終をすつかり聞き終つてから、同じやうに微笑を洩らして、

「貴方も餘つほど人が好いのね。でも、それでよかつたわね。」

と、云つてくれた。小野もそれで満足だつた。

その後米田氏から、有馬一家の人たちの方へも、其話が傳へられた。さうしたらその長兄の、當時はまださう有名でなかつた作家も、

「小野つていふ人は、ほんとに人が好いらしいね。」

と、批評したといふ話を、彼自身は人傳に聞いた。

かういふ挿話の間にも、小野の戀は、夫人の信任を負うて、益々助長されて行つた。そしてそれは、もう早晚、誰かに打明けなければ、ならないところまで進みかけてゐた。